

平成22年 6月 1日現在

研究種目：若手研究 (B)
 研究期間：2008～2009
 課題番号：20730414
 研究課題名 (和文) グループディスカッションにおける会話者の役割取得プロセスに関する動的アプローチ
 研究課題名 (英文) Dynamic approach to the speaker's role-taking process in group discussions
 研究代表者
 藤本 学 (FUJIMOTO MANABU)
 久留米大学・文学部・准教授
 研究者番号：00461468

研究成果の概要 (和文)：小集団討議実験を実施し、話者は他のメンバーとの調整のうで自分の特性に応じた発話行動を行うことを実証した。つぎに、話者役割タイプと役割特有行動を特定した上で、話者役割取得傾向である話者役割レパートリーを判断する基準を定め、基準得点を測定する尺度を開発した。一連の研究は、会話者の役割取得プロセスを解明する上で重要な基礎的知見を提供するものである。

研究成果の概要 (英文)：Small group discussion experiments demonstrated that the speakers showed utterance act corresponding to their traits, in the context of other members of the group. Then, after the speaker's role types and the role particular behaviors were identified, criteria to assess speaker's role repertoire, or a speaker's role-taking tendency, were set, and a scale to measure criterion scores was developed. This sequence of studies provides important basic findings in elucidating the speaker's role-taking process.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	2,200,000	660,000	2,860,000
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：社会系心理学、実験系心理学

1. 研究開始当初の背景

会話コミュニケーションは参加者である会話者の間で行われる。しかしながら、これまで行為に関する検討は積極的に行われてきたが、会話者自体に焦点を当てた研究は少ない。発話行動の主体である会話者は、会話

システムの重要な構成要素である。会話者を個性を持った実在として捉えたと、会話者はそれぞれ特有の発話傾向を持っていると考えられるのが自然である。しかしながら「どのように会話に参加し貢献しているのか」という話者の会話コミュニケーションにおける機

能的な独自性についてこれまで直接目が向けられることはなく、小集団コミュニケーションにおける話者の機能に関する有力な理論は未だ提唱されていない。

このような研究背景において、会話者の発話行動の独自性を明らかにするために、“話者役割”という概念を仮定し、複数の会話実験と関連する調査研究を行ってきた。話者役割に関する研究計画の特色は、会話者の発話行動の独自性を、グループ・ダイナミクスに関係の深い“役割”という観点から捉えたところにある。これまでの研究では、会話者各自の行動や会話の展開を解明する上で、「話者は会話コミュニケーションにおいて機能する上で、自らの個人特性や集団でのソシオメトリック・ステータスの構造、会話の状況に応じて自発的に話者としての役割を取得し、それに応じた発話行動を行う」という話者役割説を提唱している。

話者役割に関する研究は、基礎研究・発展研究・応用研究の3ステップで計画されている。博士論文としてまとめたこれまでの研究は基礎研究に該当する。基礎研究では、小集団討議実験を複数回実施し、発話行動の異なる側面に注目した2種類のカテゴリー・システムを併用することで、小集団コミュニケーションにおける話者の発話行動パターンを抽出している。

抽出された発言パターンは、同一の話者によって発せられた同一の発話から特定されたものである。したがって、話者役割仮説が主張するように、会話者の発話行動が会話集団において取得した話者役割を反映しているのであれば、発話行動傾向である叙述パターンと会話展開パターンから、話者役割を帰納法的ロジックにより推定できるはずである。この考えに基づく分析により、“司会”・“聴き手”・“話し手”という再現性の高い話者役割の要素を特定することに成功している。

これらの話者役割の3要素は、集団討議場面で見られる多様な役割を構成する特性である。すなわち、具体的な役割は、司会・話し手・聴き手の各要素に対する負荷パターンとして表現される。意見の衝突や関係の悪化を招くことなく議論を円滑に進めるためには、それぞれの会話者が話し合いの中で役割を分担することが重要となる。このような話者役割の分化は、多くの場合自然発生的であると考えられる。この会話中の役割分化プロセスを明らかにするのが、本研究案の主眼である。

また、並行して行われた調査研究から、“会話マネージメント”・“能動的参与”・“受動的参与”・“消極的参与”からなるコミュニケーション参与スタイルを見出している。これらは、個人によって異なる発話行動傾向の背景

に、どのように会話に関わろうとするのかという会話者のスタンス、すなわち参与姿勢の違いを意味する。会話前に実施したコミュニケーション参与スタイルを測定する“COMPASS”の回答とその後に行われた発話行動は正の関連性を示している。コミュニケーション参与スタイルを、取得しうる話者役割のレパートリーとして定義すると、会話者は自らのレパートリーに応じた役割を取得する傾向にあるということになる。それは、取得した役割が自らの役割レパートリーに合致しているか、していなければ遠いかどうかによって生じる役割負担を最小にしようとする動機が働くためではないかと考えられる。

これらの基礎研究の結果を基に、会話者の発話行動の偏りを説明すると次の通りである。「会話者はコミュニケーションにどのように参与するかという独自のスタイルを持っており、実際の会話において、この自らのスタイルに基づき話者としての役割を取得する。その際に、会話の進展や状況、メンバーとの関係性を配慮して、役割の取得と調整を行う。会話者はこの取得した話者役割に応じた発話行動を行う。そのため、会話者は独自の発話傾向を示す。」

基礎研究により、話者役割が実際の会話行動を説明しうる概念であることが示唆されている。次のステップとして重要となるのが、話者役割の取得と調整のプロセスの詳細な分析である。この話者役割の分化プロセスを解明する本研究案は、基礎研究で得られた知見を発展させる研究である。

さらに発展研究に続く応用研究として、小集団討議のパフォーマンスや個々の会話者の発話行動を事前に予測し、質の向上も目指す実践的研究を計画している。発展的研究は、この応用研究の理論ベースを確立するために必要不可欠である。

2. 研究の目的

本報告書の研究目的は、これまでの取り組みの中で明らかにされた、会話者のコミュニケーション行動の独自性という“行動”に関する知見、コミュニケーション参与スタイルおよびコミュニケーション・スキルという“特性”に関する知見、そして、リーダーシップ行動や集団構造の変容といった“グループ・ダイナミクス”に関する知見を、動的観点から包括的に検討することである。これにより会話中に行われる話者役割の取得プロセスの解明を目指す。

3. 研究の方法

討議集団 実験参加者を組分けし、討議集団を編成する。その際、人数、男女比、メンバー間の親密さ、そして役割レパートリーに基

づくメンバーの構成を、集団要因として操作する。

会話目的 特定のテーマについて共通見解を導くために討論を行わせる。討論では、正答の有無といった課題条件や、多数決の不可といった討議条件の操作を行う。

実験手続

1) 実験実施前 実験参加者は異なる控え室に召集し、全員が揃い次第、実験担当者が実験参加者を、実験室の一角をパーティションで分割したブースに案内する。

2) 調査フェーズ ブース内では、まず個人特性に関する質問紙を配布し回答を求める。本実験では、パーソナリティやスキル(藤本・大坊, 2007a)などに加え、COMPASS(藤本, 印刷中)を用い、役割レポーターであるコミュニケーション参与スタイルの特定を行う。続いて討論のテーマとなる課題が書かれたプリントを配布し、各自がそれを読み自らの意見についてまとめてもらう。

3) 教示フェーズ 討論に関する注意事項について教示を行う。主な内容は、会話時間(およそ20分間)、共通見解を導くという討論の目的、討論のテーマなどに関する事項である。

4) 討論フェーズ 実験参加者を実験室の中央に置かれた椅子に誘導し、ピンマイクの装着を求める。椅子は対面のときは120cm、3人のときは左右100cm、5人のときは左右80cm間隔で設置する。会話場面は、参加者の同意を得て、実験室の天井部に設置した3台のビデオカメラにより撮影し、討議の音声はピンマイクに加えて、床に設置した無指向性集音マイクにより録音する。

討論はブザー音を合図に始められ、18分後に再びブザー音によって打ち切る。討議中は実験者側からの干渉は一切行わず、討議の進行は実験参加者に委ねる。

5) 感想フェーズ 討論が終了した後、討論後の相互作用を防ぐために、ただちに実験参加者を元のブースに誘導する。そして、アンケート用紙を配布し、討議全体や自分の行動に関する感想、および他のメンバーに関する印象について、解答を求める。

4. 研究成果

科学研究費助成金を受けて行われた研究の成果として、投稿中の論文1本、学会発表4回が得られた。これまでの研究によって、話者役割には司会話し手聞き手があり、さらにコミュニケーション参与スタイルの知見を踏まえると聞き手は傾聴者と傍聴者に分けられる。したがって、話者役割は4種類に大別することができる。そこで、投稿中の論文(研究1)では、発話行動の規定因としてコミュニケーション参与スタイルに注目し、調整変数として会話参加者のソシオメトリック・ステータスと、集団内のメンバー構成(コ

ミュニケーション参与スタイルの比率化)を加味して、話者役割説における発話行動生起プロセスについて検討を行った。その結果、コミュニケーション参与スタイルは比率化することで、仮説通り発話行動を規定すること、そして、ソシオメトリック・ステータスは調整変数ではなく独立変数として発話頻度を促進することが明らかとなった。これらの知見は、これまでの発話行動生起プロセスのモデルに一部修正を迫ったが、話者役割説の考えを支持するものであった。

学会発表は、話者役割タイプを特定する2回の発表と、会話者の話者役割取得レポーターを予測する基準を明らかにする2回の発表に分けられる。

研究1によって、コミュニケーション参与スタイルと発話行動の関連性が明らかになったが、この研究では話者役割は仮説的な説明概念に留まっていた。実験や調査によるこれまでの一連の研究によって、話者役割は“司会”、“話し手”、“傾聴者”、“傍聴者”に大別できることが繰り返し証明されているものの、たとえば話し手であっても同様ではなく、実際には多様な役割があるはずである。そこで、前者の研究発表では、話者の発話行動の独自性を説明する仮説的概念であった話者役割に直接焦点を当て、役割特有行動から話者役割タイプを帰納的に特定した上で(研究2)、話者役割タイプと個人特性との関係性について検討を行った(研究3)。その結果、26種類の役割特有行動によって特徴づけられる18種類の話者役割タイプが特定された。そしてこれらは、個人特性を基準にすると“司会系役割クラスタ”、“論者系役割クラスタ”、“受信系クラスタ”、“逸脱系話者クラスタ”に分類されることが明らかとなった。話者役割タイプは18種類あるが、話者役割は“司会”、“話し手”、“傾聴者”、“傍聴者”に大別されることを改めて証明したことになる。ただし、逸脱系話者クラスタには、会話に参加しない傍聴者だけでなく、妨害行為や自分勝手に振る舞う役割を含んでいる点がこれまでと異なっている。

具体的な話者役割タイプが特定されたことによって、研究の焦点は会話者がどのような話者役割を取得するのかを予測することに移った。そこで、後者の研究発表では、話者役割取得傾向である話者役割レポーターを判断する基準の特定およびその尺度の作成を行い(研究4)、妥当性を検証するためにコミュニケーション参与スタイルや会話行動に対する他者評価との関連性について検討を行った(研究5)。それにより、18種あった話者役割タイプは11種の基準に再編された。これら11の基準は“単独行動系話者役割レポーターセット”、“議論貢献系話者役割レポーターセット”、“受信系話者役

割レパトリーセット”、“消極系話者役割レパトリーセット”に分かれている。この分類は“司会者”、“批評家”、“妨害者”が“単独行動系話者役割レパトリーセット”としてひとつのまとまりを形成するという、これまでにない分類であった。また、回答傾向からはアクティブ系の“万能型”、“積極型”と、パッシブ系の“回避型”、“妨害型”、“傍聴型”、“受容型”という6パターンが特定された。これらは“能動型”、“妨害型”、“回避型”、“受動型”に大別することもできる。研究2から続く話者役割に直接焦点を当てた研究では、妨害者が小集団討議のパフォーマンスを左右しうることを示唆している。

さて、話者役割説では研究1で示されたように“会話中に他のメンバーと調整しながら、話者役割を取得する”ことが重視されていることに加えて、話者役割は会話中に適宜修正されると仮定している。これまでの会話実験研究における発話行動の分析は頻度を扱ったものである。しかしながら、話者役割説では役割取得を動的に捉える必要がある。本報告書の成果である話者役割レパトリー基準は、この動的観点を踏まえた概念である。話者役割説の次のステップは、話者役割レパトリーを踏まえて、会話中に取得・調整される話者役割の変化を発話行動から特定することである。そのために、階層的役割トレース法を考案している。この階層的役割トレース法は、本報告書の申請時の分析法の試案（帰納的役割トレース法）を、話者役割タイプおよび役割特有行動に関する知見をはじめ、複数のアイデアを導入することで改良した分析法である。階層的役割トレース法の概要は、まず一連の会話を最小の相互作用単位に分解し、その中で話者の行動をコーディングすることで、各相互作用単位における話者の基礎役割を特定する。次に、複数の相互作用単位によって構成される話題展開単位（著書①のトピックレベル3 [以下、TLv3]）で基礎役割をパターン化することで、各話題展開単位における話者役割を特定するという流れで行われる。

グループ・ディスカッションでは単一の主題（TLv1）に関する複数の課題（TLv2）について話し合われるが、ディスカッションを通して単一の役割を取り続ける者もいれば、課題やその中の話題（TLv3）に応じて役割を変容させる者もいる。階層的役割トレース法はこういった会話の流れの中で変遷する話者役割の分化と調整のプロセスを特定することができる分析法である。

この分析法を用いた発話行動分析については、2年間という時間的制約において報告するに足るほど十分には検討することができなかった。階層的役割トレース法を用いた話者役割に対する動的アプローチを、今後精力

的に行っていききたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計0 [投稿中1件]）

- ① 藤本 学、コミュニケーション参与スタイルに注目した小集団会話における発話行動生起プロセス、査読有、実験社会心理学研究、審査中

〔学会発表〕（計2件 [発表予定2件]）

- ① 藤本 学、グループディスカッションにおける話者役割、日本心理学会第73回大会、2009.8.26、立命館大学
- ② 藤本 学、コミュニケーション行動特性を基準とした話者役割タイプの分類、日本社会心理学会第50回大会・日本グループダイナミクス学会第56回大会合同大会、2009.10.11、大阪大学
- ③ 藤本 学、会話者の話者役割レパトリーを特定する基準、日本グループダイナミクス学会第57回大会、2010.8 (発表予定)、東京国際大学
- ④ 藤本 学、話者役割レパトリー基準と参与スタイルおよび討議行動評価との関連性、社会心理学会第51回大会、2010.9 (発表予定)、広島大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤本 学 (FUJIMOTO MANABU)
久留米大学・文学部・准教授
研究者番号：00461468